

平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 26K08	氏 名	浅見 信彦
研究主題 —副主題—	知的障害特別支援学校における ICT 機器を活用した授業に関する研究 —中重度の知的障害児を対象とした国語の授業を通して—		
所属校	都立墨田特別支援学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>近年、キーボードやマウス等を介した操作ではなく、画面を直接ペンや手でタッチすることで、操作を可能とする電子黒板やタブレット型端末等の ICT 機器が都立知的障害特別支援学校に導入され始めている。このような直接操作を可能とする ICT 機器は、中重度の知的障害のある児童・生徒が、ICT を活用して学習する機会を拡大できる要素となると考えられる。</p> <p>そこで、所属校において ICT 活用状況の実態調査を行い、知的障害児を対象とした ICT 機器を活用する新たな国語の授業モデルを提案する。さらに、検証授業を通してその学習効果を明らかにすることで、中重度の知的障害児の学習に ICT 機器を活用した授業が推進されることを期待し、研究を行った。</p>
II 研究の方法	<p>1 知的障害特別支援学校における ICT 活用に関する実態調査</p> <p>所属校は、平成 24・25 年度に、「ICT 活用推進指定校」として東京都教育委員会より事業指定を受け、ICT 機器の授業活用推進に学校全体として取り組んだ実績のある学校である。所属校（教員数 102 名）において、質問紙によるアンケート調査を行い、ICT 活用の実態調査を行うこととした。</p> <p>調査結果から現状の把握と課題点や改善の方策について考察し、検証授業につなげていくこととした。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>質問項目（概要版）</p> <p>(1) 基本情報（担当学部、担当教科、経験年数など）</p> <p>(2) ICT 機器の授業活用についての実態と授業活用に対する意識調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ICT 機器の授業活用経験の有無、活用したことのある教科等、機器名 ・ 活用の形態（個別指導・集団指導、提示型教材・操作型教材） ・ 活用した教材について（自作・市販） ・ ICT 機器の授業活用による教育効果（意識調査・理由） ・ 知的障害児に対して ICT 機器を活用した授業を行う理由・行わない理由 <p>(3) 更なる ICT 機器の活用推進に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これから ICT 機器を活用した授業に期待がもてる教科等 ・ ICT 機器の授業活用が今後、進められるために必要なことはなにか </div> <p>2 ICT 機器の授業活用を行った検証授業の実施</p> <p>(1) 検証授業の対象となる生徒について</p> <p>療育手帳（東京都は愛の手帳）を所持している知的障害のある児童で、都立知的障害特別支援学校中学部に在籍する生徒を対象とした。</p> <p>検証授業は、国語のグループ学習で行うこととした。所属校における国語の指導は、学年集団を生徒個々の認識力や障害特性に応じて段階別にグループを再編成して実施している。対象グループは中重度の知的障害児が所属するグループで、生徒は 5 名、指導体制は 3 名のグループである。</p> <p>(2) 教育的効果の検証について</p> <p>従来型の実物教材で行う授業と ICT 機器を活用した教材で行う授業を比較する。ビデオ記録を行い、教材へ注目した延べ時間数をカウントすることで客観的データを収集する。また、教材に対する興味・関心や学習内容の理解度、課題へ主体的に取り組んでいる姿など、生徒の授業での様子や変容を授業担当者が記述式の記録で行っていく。</p> <p>検証授業は同様の内容で複数回実施し、回数を重ねることでの変化も分析する。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1 ICT 活用に関する実態調査の結果 実態調査で明らかになったことは、学校全体として ICT 機器の授業活用が、「授業活用の経験がある」と回答した教員が全体の 91.7%を占めており、学校として ICT 機器の授業活用の土壌ができてきていること、また、ICT 機器の授業活用形態として、「集団学習」の場面で、「提示型教材」として活用していることが多いということ、さらに、ICT 機器を授業活用することで、児童・生徒の興味・関心が向上し、授業への参加の促進が期待できると教員たちは実感し、活用していることが明らかになった。</p> <p>2 検証授業に向けた電子教材の開発 実態調査で明らかになった現段階における ICT の活用より、更に一步進んだ授業活用を目指し、教材開発を行うこととした。それは児童・生徒自身が ICT 機器に触れながら学習を展開する「操作型教材」を開発することである。 (1)「よく見てタッチ！」(注視・追視・目と手の協応の学習) (2)「デジタル絵本」による読み聞かせ</p> <p>3 検証授業の実施と授業分析 (1)二種類の電子教材を活用し、合計7時間の検証授業を行った。授業分析は、二つの方法で行った。 ビデオ記録から見取れる生徒の変容について 読み聞かせを行っている全体の時間に対して、教材に注目している時間の割合を、ビデオ記録を基に測ることで授業への参加度を検証した。 実物絵本による実践(1回実施)とデジタル絵本による実践(3回実施)のそれぞれの授業参加率を比較すると、デジタル絵本による読み聞かせの方が教材へ注目している時間が長いことが明らかとなった。 (2)教員による記述式記録から読み取れた生徒変容について グループ担当教員による記述式の記録から、生徒の変容や ICT 機器を活用した授業の教育的効果と考えられる記述を抽出し内容をまとめた。ICT 機器を活用したことによる主な効果は、以下のとおりである。 ・服薬により覚醒度が低い生徒が、画面の変化が楽しみで、注目して参加できる様子が多く見られた。注意が逸れても教員による言葉掛けではなく、効果音に引きつけられ自発的に注意を戻すことができた。 ・タッチ教材に強い興味をもち、画面の変化を楽しみながら活動することができた。 ・他者への関心が少ない生徒が、友達や教員がやっている様子をよく見るようになり、他人の活動の結果(できたこと)を自分のこととして共感する様子が見られた。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>検証実践数や対象事例はまだ少数ではあるが、本研究を通して、ICT 機器の授業活用に一定の教育的効果があったことが明らかになった。しかし、授業実践を進める中で、課題も明らかになった。それは、以下の三点で課題解決に取り組んでいきたい。</p> <p>(1)ICT 機器の機能上の問題への対応 (2)デジタル教材を作成する上での著作権の問題への対応 (3)題材に合わせた学習形態の工夫</p> <p>最後に、ICT 機器は、活用することが目的なのではなく、児童・生徒の学習を支援する一つのツールであるという認識を忘れてはいけない。ICT の活用により得られる教育的効果はあるが、従来の実物教材にも活用の利点がある。児童・生徒の学習がより一層効果的に進むための方法を、児童・生徒の実態や学習のねらいに照らし合わせて、教員が選択していくことが重要である。</p>